

過酷な食の最前線

安心の番人

— 獣医師が足りない —

穏やかな不知火海を望む熊本県南部の山中。よんのです」と訴える。約40年、地域の仲間と「いい牛」を作るため試行錯誤を繰り返してきた。今や九州を代表する高級和牛になった「あしきた牛」はその結晶、地域の宝だ。「牛が尿路結石を起すと、半日で膀胱が破裂して売り物にならない。だが、5年前に脳梗塞を患った体は、時に思うように動かない。「牛を診るのは体力勝負。大きな手術をするのはしんどいよ」と嘆く。

3年ほど前、80代半ばまで現役だった先輩が亡くなり、地元で約3000頭を超える牛を診るのは坂本さんだけになった。隣の芦北町で約280頭の牛を育てる田浦裕一さん(60)は「この仕事は獣

前、深夜の発症で誰も往診ができずに牛が死んだ。「手塩にかけた牛の息が止まるのを、あきらめて見ざるしかない。あんまりいいことは勘弁してほしい」。田浦さんの目に涙が浮かんた。

農家にとって獣医師は二人三脚で地域の宝を守る、かけがえのない相棒だ。この辺の農家は20、30代の後継ぎがようやくばってってくれるから、私も死ぬまでやりたい。でもその後は……」。坂本さんの言葉がとぎれた。

家畜の診療 各地ではほころび

家畜の病気を検査する獣医師が足りない自治体も目立っている。日本の酪農王国も例外ではなく、北海道の獣医師職員の数不足は92人。昨年度は52人募集したが、採用は21人だった。今年度は74人を募集している。

大地が広がる十勝平野。死し牛のBSE(牛海綿状脳症)検査を担当す

る北海道十勝家畜保健衛生所東部BSE検査室に牛の死骸がトラックで次々と運ばれてきた。1頭ずつ後頭部を裂き、2人1組でBSEの病原体が蓄積する部位を抜き取る作業が続く。牛の死臭が、真顔ではいられない独特のにおいが鼻を突く。

検査室では1日平均20頭、北海道全体では年5万頭近い死亡牛検査が実施される。腐敗した死骸も扱う作業は「人気がないのが現実(松本繁幸次長)で、人手不足は残業と非常勤の獣医師で補う。

家畜の検査は、生産者が育て上げた家畜の財産価値をも左右する。西日本のある獣医師は食肉衛生検査所に勤務していた際、生産農家に短刀を突きつけられたことがある。「病気の牛を処分する」と伝えると、右腹からわずかに数センチのところで刃先が止まった。その状態が2時間半。にらみ合



黒毛和牛の巨体に聴診器を当ててみる坂本さん(左)。畜産農家の3代目を継いだ青年を前に「若くは後継ぎたちのためにも、またがんばらんとな」と熊本県水俣市で、奥野敦史撮影

いのも、相手がようやく短刀を下ろした。「生産者にとっては1頭数百万円という大切な財産。だが、病気の牛を見逃せば国民に被害が及ぶ。我々は最後のとりでなんです」

体力と精神力の限り、時には命をかけて獣医師たち。仕事の過酷さゆえに、暮らしの安心と安全を守る現場では、ほ

連載へのご意見、ご感想をお寄せください。手紙は〒100-8051毎日新聞科学環境部あて(住所は不要です)、ファクスは03・3215・3123、電子メールはky.science@mbx.mainichi.co.jpです。